

経済と経営 21-4 (1991.3)

〈論文〉

エンゲルスによる『資本論』第1巻編集をめぐって
——MEGA 編集者との意見交換と今後の課題——

大村 泉

は し が き

本稿はエンゲルスによる『資本論』第1巻の編集に関連して、昨秋筆者が新MEGA (Marx-Engels-Gesamtausgabe) 当該巻の編集責任者アイケ・コッフ教授 (Prof. Dr. sc. Phil. Eike Kopf) と行った意見交換の全容を教授の許可を得て公表しようというものである。以下、Iには筆者が1990年10月17日付で教授に送付した論文*の、IIにはこれに対して同年10月28日付で

*) Izumi Omura, Welche Marxschen Hinweise bzw. Anweisungen benutzte Engels bei seiner Vorbereitung zur 3. deutschen Auflage des ersten Bandes des „Kapitals“? : Zu deren Wiedergabe im MEGA-Band II/8. なお、本稿は、旧稿「エンゲルスによる『資本論』第1巻編集の根本問題」(『経済』第302号, 新日本出版社, 1989年6月)の論旨を、当時未見であったMEGA第II部第8巻の編集者「序文」や「テキスト史」、及びフランス語版『資本論』へのマルクスの書き込みを初めて公表したMEGA第II部第7巻の検討を踏まえて再構成したものである。本稿はベルリン・MEGA財団の機関誌 *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung* Heft 30 (近刊) で公表される。また筆者は、トリーア・Karl-Marx-Haus 研究所長 Dr. Hans Pelger から、本稿を末尾で予告した準備中の論文と共に同研究所の研究叢書の別冊として刊行したいという申し出を受けている。

送られてきた教授のコメントの邦訳を掲げる。なお、教授のコメントには新たに生まれた共通の認識と共に私見に対する批判も含まれていたもので、翻訳末尾に別項を設けてこれに対する簡単な論評を加えて今後の検討課題を明確にした。

I 『資本論』第1巻ドイツ語第3版の編集を準備する際エンゲルスはマルクスのいかなる指摘ないしは指示を用いたのか?——第3版のMEGAでの再刊によせて——

1 MEGA 編集者の評価変更

1989年末に『資本論』第1巻ドイツ語増補第3版を収載するMEGA第II部第8巻が刊行された。止目すべきことには、ここでMEGA編集者は、同版に対する以前の評価を変更していた。1984年には彼らは次のように主張していた。「これまで大半の研究者が採用していたように、第1巻ドイツ語第2版がマルクスの最終決定版であるのではなく、1883年の第3版がそうである」¹⁾、と。ところが、この新しい第II部第8巻では、MEGA編集者はもはや第3版をマルクスの最終決定版とは言わないのである。ここでは彼らは、「第3版はマルクスの考えにしたがっている」²⁾としているのである。どうしてこのような評価変更が生じたのであろうか。

1) Rolf Hecker/Edgar Klapperstück/Eike Kopf, Zur Herausgabe der dritten deutschen Auflage des ersten Bandes des „Kapitals“ im MEGA-Band II/8. In : *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung*, Heft 17, Berlin 1984, S. 80. (ロルフ・ヘッカー, エトガー・クラッパーステュック, アイケ・コップ/大村訳「MEGA第II部第8巻における『資本論』第1巻ドイツ語第3版の刊行によせて」, 『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第1号, 1987年10月)。

2) MEGA II/8, S. 17**

これまでMEGA編集者は次のような想定を行ってきた。エンゲルスは第3版を「『資本論』第1巻のための変更一覧表」に基づいて編集したのであって、エンゲルスが「ドイツ語第2版に対するフランス語版での変更の全てを必ずしもドイツ語第3版に取り入れなかった」³⁾のは、マルクスの手元に残されていたこの「一覧表」を使うことができたからであった、と。MEGA編集者の調査によれば、『資本論』第1巻の編集のためにマルクスが残した諸指示なかで、「一覧表」には必要な変更箇所が「最も正確に」⁴⁾記されていた。したがってMEGA編集者は、「一覧表」と第3版とは密接な関連がある、と考えていたのである。

第II部第8巻でも編集者は確かに次のように主張している。第3版を準備する際、エンゲルスは「十中八・九」⁵⁾「一覧表」を使っている、と。ところが同時に彼らは次のようにいうのである。エンゲルスは、マルクスが「一覧表」で纏めた変更指示の「必ずしも全てをドイツ語第3版で考慮していない」⁶⁾、と。これら二つの見解は整合しない。言葉を換えれば、以前の想定とは対立して、MEGA編集者は「一覧表」と第3版との直接的な関連に確信がもてなくなっているのである。ここに編集者の評価変更における根本的な問題が存在する。

日本人研究者の厳密な検討によれば、「一覧表」における指示のうち、約70箇所はドイツ語第2版の本文をフランス語版の本文と取り替えよという指示である。ところがこのうち約45の指示は第3版でごく部分的にしか考慮され

3) Jutta Hoschek/Eike Kopf, Bemerkungen zur Erfassung bzw. Darstellung inhaltlicher Unterschiede der französischen Ausgabe zu den deutschen Auflagen des ersten Bandes von Marx' „Kapital“ in der MEGA. In: *BzMEF*, H. 23, 1987, S. 75.

4) Vgl. Hecker u. a., S. 72.

5) *MEGA* II/8, S. 850.

6) *Ebenda*, S. 17**

ていないか、あるいは全く考慮されていないのである⁷⁾。このような事実からして既に、エンゲルスはいったい何に立脚して第3版を編集したのかという問題が生じる。編集でエンゲルスは「一覧表」を実際に用いたのか。なぜに、またそもそも「一覧表」はどのようにして作成されたのか。こうした問題を厳密に検討すると、私見では、エンゲルスの諸版——これには1887年の英語版、1890年の第4版も含まれる——は、『資本論』第1巻の本文改訂に関するマルクスの根本的な考え方を十分反映していない、という結論を生み出さざるを得ない。

2 「一覧表」の成立と第3版編集におけるエンゲルスの実際の指針

「『資本論』第1巻のための変更一覧表」とは1877年にアメリカでF. A. ゴルゲによって計画されたが刊行されなかった「『資本論』第1巻アメリカ版のための変更一覧表」の基底稿である。マルクスは後者を1877年10月にゴルゲに送っている⁸⁾。エンゲルスがゴルゲからこの「一覧表」をはじめて譲り受けたのは1886年であって、第3版が刊行された後である。彼はこれを1887年の英語版の「序文」で「英訳のための一連の指示」⁹⁾と呼んでいる。これら二つの「一覧表」の指示は全てが完全に一致するわけではない。しかし両者間

7) 佐藤金三郎「『資本論』第1巻、アメリカ版のための編集指図書」(マルクス)について〔ここで佐藤が紹介している「『資本論』第1巻アメリカ版のための編集指図書」第1案が本稿でいう「『資本論』第1巻のための変更一覧表」であり、佐藤の「『資本論』第1巻アメリカ版のための編集指図書」は本稿では「『資本論』第1巻アメリカ版のための変更一覧表」と表記している。この違いは、本稿ではMEGA第II部第8巻の表記にしたがっているのに対して、佐藤は社会史国際研究所(IISG)の目録に依拠していることによる〕、『経済学年報』第31号、1971年2月、および林直道『フランス語版資本論の研究』、大月書店、1975年、参照。

8) Vgl. *MEW*, Bd. 34, S. 302f.

9) Marx, K., *Capital, a critical analysis of capitalist production*. Vol. I, Swan Sonnenschein, Lowrey, & Co. London 1887, p. X.

に決定的な内容上の差異は存在しない。

アメリカ版のためのプランをゾルゲから受け取って以後、マルクスは、1877年9月から10月にかけて、ドイツ語第2版とフランス語版に集中して取り組み、二つの「一覧表」を執筆した。MEGA編集者の調査によれば、この仕事は次のようにして進められた。「マルクスは、フランス語版で〔ドイツ語版に〕移されるべき箇所をチェックした。彼はドイツ語第2版自用本の対応する約300ページの諸章句でフランス語版への参照指示を与えたり、あるいは約200のページで改訂を行った。彼は、ほとんど全ての変更を『「資本論」第1巻のための変更一覧表』に取り入れた。マルクスはこれを通読してからゾルゲあての一覧表の作成にとりかかった」¹⁰⁾。つまり、「一覧表」はマルクスの自用本における指摘ないしは指示、及びフランス語版の一版本における書き込みを基礎に成立したのである。

さて、エンゲルスは「一覧表」を本当に用いたのであろうか。確かに「一覧表」はマルクスの手元にあった。しかし興味深いことには、第3版を準備する際——同版の刊行後もそうなのだが——エンゲルスが「一覧表」に言及することは一度もない。だが彼は、マルクスの自用本における指摘ないしは指示とフランス語版の一版本における書き込みとを第3版編集の導きの糸にした、と再三明言しているのである。例えば、第3版の「序文」で彼は次のように述べている。「果たせるかな、遺品のなかには、マルクスによってところどころ訂正され、またフランス語版への参照が指示されているドイツ語版が1冊あった。また利用すべき箇所に彼が印をつけたフランス語版も1冊あった」¹¹⁾。1883年6月末に彼はゾルゲに次のように書き送っている。「『資本論』第3版は私に大変な重労働を課している。手元には、フランス語版に基づいてマルクスが変更すべき箇所や補足を指示した版本が1冊あるが、細部

10) *MEGA* II/8, S. 805f.

11) *Ebenda*, S. 57.

の仕事はまだこれからだ」¹²⁾。

マルクスは自用本の本文改訂の指示を「一覧表」で考慮しているが、全てにわたってではない。「一覧表」に対応する箇所を見いだせない自用本の指示のなかにもエンゲルスが第3版に取り入れたものがある。さらにエンゲルスが第3版の刊行後はじめてゾルゲから受け取った「『資本論』アメリカ版のための変更一覧表」には彼の欄外書き込みなどを多数見いだすことができる。しかし〔マルクスの手元に残され、以前 MEGA 編集者が重視していた〕「一覧表」にはそうした痕跡は全くない、という事実も存在するのである。

こうした事実的な関係は、エンゲルスが第3版の準備に際して用いたのは「一覧表」ではなく、マルクス自用本における指摘ないしは指示及びフランス語版への書き込みではなかったか、ということを示唆する¹⁴⁾。

「一覧表」及びマルクス自用本における指摘ないしは指示は MEGA 第II部第8巻に収載されている。第II部第7巻にはフランス語版とマルクスの書き込みが記されているフランス語版の版本、すなわち、マルクスの愛娘、イエニー・ロンゲへの献呈本が収載されている。以下では、この二つの巻を基礎に、典型的な事例を見ることによって、上記仮説を検証することにしたい。

12) *MEW*, Bd. 36, S. 45.

13) Vgl. *MEGA* II/8, S. 25ff.

14) エンゲルスは英語版の「序文」でドイツ語第3版の編集はマルクスが遺した「第3版のための最後の指示」に立脚していると述べている。最近の MEGA 編集者の論文によれば、この「第3版のための最後の指示」で念頭におかれているのは「多分」マルクスの「口頭の指示」である (Vgl. Rolf Hecker/Helga Hues/Eike Kopf, *Nochmals zur Entstehung und Bedeutung der dritten deutschen Auflage des ersten Bandes des „Kapitals“*. In: *BzMEF*, H. 27, Berlin, 1989, S. 227, (ロルフ・ヘッカー, ヘルガ・ヒュース, アイケ・コップフ/大村訳「再び『資本論』ドイツ語第3版の成立と意義によせて」, 『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第5号, 1989年1月))。しかしこうした主張は説得力を欠く。なぜなら、①「口頭の指示」がはじめて言及されたエンゲルスの第3版の「序文」では、その性格は主として文体に関わるものとされ、②第3版の準備作業でエンゲルスはこれについて全く言及していないが、マルク

3 エンゲルス編集の実態

[A]

「一覧表」はドイツ語第2版第14章〔「絶対的及び相対的剰余価値」〕の本文を次のように改訂することを指示している。

「a)〔ドイツ語第2版〕530 ページから 534 ページの上から 23 行目まではフランス語版 219 ページ（第 I 欄及び第 II 欄）と 220 ページ（第 I 欄及び第 II 欄）の上から 28 行目までと取り替えること。結びの „milliers de siècles“ の直後にドイツ語版の結び „Die vorhandne Produktivität der Arbeit, wovon das kapitalistische System ausgeht, ist nicht Gabe der Natur, sondern der Geschichte“（534 ページ，上から 23-24 行目）を続けること。

b)〔ドイツ語第2版〕537 ページ 6-13 行目をフランス語版の 221 ページ第 II 欄の „limite naturelle à celui-là” で終わる 14-27 行目と置き換えること。

c)〔ドイツ語第2版〕538 ページの „Wie die geschichtlich entwickelten“ etc に始まり „einverleibt wird“ に終わる最後の 3 行を抹消し，その代わりに私がフランス語版で新たに付け加えた箇所，すなわち， „Le travail doit donc posséder etc.“ という言葉で始まる 222 ページ，上から 30 行目から 223 ページ第 II 欄の „esprits forts.“ に結ばれる章の終わりまでを続けること。」¹⁵⁾

引用文に明らかなように、「一覧表」では必要な変更の指示が非常に正確、且つ明瞭に記されている。エンゲルスはドイツ語第3版第14章を編集する

ス自用本の指摘ないしは指示及びビロンゲ夫人あて献呈本における書き込みには再三言及しているからである。

15) MEGA II/8, S. 10.

際、多くの章句をフランス語版から取り入れた。しかし変更は、ここに引用した「一覧表」の指示と必ずしも一致しない。

第一に、変更指示 a) はドイツ語第 2 版第 14 章の前半をフランス語版の本文と置き換えなければならないことを指示している。しかしエンゲルスは指示通りに本文の置き換えを行わず、フランス語版、219 ページ以下の若干の諸章句をドイツ語第 3 版に取り入れたにすぎない。

どうしてこのようなことが生じたのか。この場合注意すべきは、「一覧表」の指示 a) に対応するマルクス自用本の指摘ないしは指示およびロンゲ夫人へのフランス語版献呈本の書き込みが非常に不正確で不分明なことである。

すなわち、マルクスの自用本では、フランス語版の本文と置き換えられるべき箇所の最後に位置する „ist“ という単語の下に、「下線が引かれ、右欄外に „6“ という数字」¹⁶⁾ が記入されている。この数字 „6“ は、単語 „ist“ を含むセンテンスの行数を上から数えた行数を指し、„6“ という数字そのものは、「一覧表」の指示 a) で指示されている行数、すなわち、[同じセンテンスを下から数えた場合の行数] „23“ に対応している。しかしここには文章による指示は存在しない。またロンゲ夫人への献呈本では、マルクスは対応する「部分を脚注を含めて」¹⁷⁾ 枠で囲っているものの、やはりここでも文章による指示は与えていない。自用本で「一覧表」の指示 a) に対応する文字による指示——それ自体不完全なものだが——は「〔フランス語版〕 219 ページ以下」¹⁸⁾ というものだけであって、マルクスはこれを自用本 530 ページの「左欄外」に記している¹⁹⁾。

「一覧表」を見ることがなければ、マルクスの自用本の „ist“ という単語に引かれた「下線」や行数 „6“、あるいはロンゲ夫人あて献呈本での枠囲いの

16) Ebenda, S. 879.

17) MEGA II/7, S. 757.

18) MEGA II/8, S. 879.

19) Ebenda.

意味を知ることはできないであろう。エンゲルスがドイツ語第2版第14章前半を対応するフランス語版の本文と完全に置き換えなかった理由はここにある。おそらく彼は「〔フランス語版〕219ページ以下」というマルクス自用本の書き込みに従い、これによってフランス語版「219ページ以下」から若干の諸章句を取り入れたのであろう。

第二に、第3版第14章で「一覧表」の指示b)に対応する変更は行われていない。何故であろうか。「一覧表」の指示b)は全く明白であって、これにしたがえば、ドイツ語第2版537ページの„Die Gunst der (6行目) … beginnen kann. (13行目)“という部分是对应するフランス語版の本文にすっかり入れ換えなければならない。しかしマルクスの自用本ではこの部分は「下線で区分され、右欄外の初めに „6“ という数字が、終わりに „13“ という数字²⁰⁾が記されているにすぎない。ここでも「一覧表」を参照しない場合には、数字 „6“ と „13“ の意味するところは不明であろう。エンゲルスが本文改訂を企てることができなかつたのは、ここでもマルクスの自用本の指示が彼には余りにも不明瞭にすぎたからにほかならない²¹⁾。

第三に、「一覧表」の指示c)にしたがえば、第14章末尾の3行„Wie die geschichtlich entwickelten … einverleibt wird“は抹消され、代わりにフランス語版で初めて付け加えられた剰余価値の源泉に関するJ. S. ミルの学説批判が当該箇所に置かれなければならない。本文抹消の前者の指示をエンゲルスは無視した。これは彼がマルクスの自用本で削除されるべきパラグラフの上に一本の横線が引かれていたのを見出すことができたにすぎないからで

20) Ebenda, S. 881.

21) ロンゲ夫人あて献呈本では対応する本文の一節に「14) 行目」という行数がつけられ、枠で囲われている。そして同頁(221頁)下欄外には、„X aus d[em] deutschen Text p. 537 hier zuzusetzen : nämlich durch die Bestimmung des Punktes, wo d[ie] Arbeit für andere beginnen kann“という指示がある(Vgl. MEGA II/7, S. 758)。編集の際、エンゲルスはこの指示も無視しているといえよう。

ある²²⁾。これに反して、エンゲルスはミル批判をフランス語版から第3版に取り入れた。果たしてエンゲルスは「一覧表」の部分的な活用を行ったのであろうか。そうではない。彼は「一覧表」を全く利用していない。なぜなら第3版第14章の脚注 „9 a“ によれば、彼はこの部分を自分自身の判断で追加したと述べているからである²³⁾。

[B]

エンゲルスは第23章でも多くのテキストの変更を企てた。例えば「一覧表」は次のように述べている。

「ドイツ語版ではフランス語版の本章の緒論、すなわち、269 ページの (第 I および II 欄 (下から) 7 行目まで) „l'accumulation capitaliste“ という言葉に終わる部分を欠いている。したがってこの部分はフランス語版から翻訳すること。そしてそれにドイツ語版テキスト, „*rascher das Kapital wächst*“ に終わる 637 ページ下から 5 行目まで (注は数えない) を続けること。」²⁴⁾

確かに、エンゲルスは編集に際して、第23章第1節にフランス語版の章の始まりを取り入れた。しかしこのこともエンゲルスが実際に「一覧表」にしたがったことを意味しない。なぜなら、マルクスは自用本第23章第1節の標題直後で「+フランス語版本文の導入部分を補完すること」²⁵⁾とはっきりと指示しているからである。またロンゲ夫人あて献呈本では、マルクスは対応

22) Vgl. *MEGA* II/8, S. 881.

23) ロンゲ夫人あて献呈本でマルクスは付加されるべき本文部分を枠で囲っている。しかしこの「枠囲い」以外には、行数 „30“ と記号 „+“ がみられるだけである。「一覧表」を参照しない場合には、この枠囲いなどが意味するところは明瞭ではない。ちなみに、エンゲルスは、1873 年末の時点で既に、フランス語版でのミル批判に関心をよせている (Vgl. *MEW*, Bb. 33, S. 98)。

24) *MEGA* II/8, S. 14f.

25) *Ebenda*, S. 901.

する同章の導入部分を囲っていたのである²⁶⁾。

これにたいして第3節では「一覧表」の指示は無視されている。すなわち「一覧表」は次のように述べている。

「第3節『相対的過剰人口の累進的生産等』 „Gesetzt, sagt H. Merivale etc.“ にはじまる本節のはじめ (653 ページ) から 658 ページ (下から 18 行目まで) はフランス語版第III節のはじめ (*Production croissante etc.*) 276 ページ (第II欄) から „des surnuméraires“ に終わる 280 ページ 下から 3 行目を含めたところまでにしたがって翻訳すること。」²⁷⁾

この「一覧表」の指示にしたがうと、第3節本文の前半部分はすっかり変更される。また既に筆者が旧稿で明らかにしているように、この変更によって、資本家的過剰人口の必然性の論述にみられる欠陥はなくなる²⁸⁾。しかしここでエンゲルスは全く変更を企てていない。理由についてはこれまで述べたことがここでも妥当する。すなわち、マルクスの自用本でフランス語版テキストに置き換えられるべき箇所の冒頭部分 (第2版, 653 ページ, 1-7 行) 欄外には „φ“ という印が、終わりの部分 (同, 658 ページ, 18 行) には „×“ という記号があるにすぎず²⁹⁾、ロンゲ夫人あて献呈本ではマルクスはドイツ語版に移されるべき本文に「線を引いている」³⁰⁾ だけなのである。いずれの版本でも不明瞭な指示しか記されていないし、文章による指示はいっさい存在しない。エンゲルスが第23章第3節の前半で全く本文改訂を行わなかった理由は再びここにある。

26) Vgl. *MEGA* II/7, S. 763.

27) *MEGA* II/8, S. 15.

28) Vgl. Izumi Omura, Zum Marxschen Verzeichnis der Veränderungen für eine amerikanische Ausgabe des ersten Bandes des „Kapitals“ : Welche Ausgabe sollen wir für die letzte von Marx' Hand halten ? In : *BzMEF*, H. 27, 1989.

29) *MEGA* II/8, S. 905f.

30) Vgl. *MEGA* II/7, S. 764.

4 ドイツ語第3版はいわば未完のアメリカ版である

筆者の精査したところでは、以上述べたことは第3版での他の全ての変更にも妥当する³¹⁾。したがって、第3版を準備する際、エンゲルスが「十中八・九」「一覧表」を利用している、という MEGA 編集者の主張には根拠がない。同時にまた彼らの次の見地、すなわち、エンゲルスは、マルクスが「一覧表」でまとめた変更指示の「必ずしも全てをドイツ語第3版で考慮していない」、というのも説得力がない。彼は「一覧表」を第3版で全く利用していないのである。

MEGA 第II部第8巻で MEGA 編集者は次のように主張していた。「第3版はマルクスの考えにしたがっている」と。だがこの「考え」とは一体何なのか。少なくともエンゲルス自身にとっては、「マルクスの考え」とは、マルクス自用本における指摘ないしは指示及びロンゲ夫人あて献呈本における書き込み以外のなにものでもなかった。ところがこれらの書き込みはエンゲルスが第3版の「序文」で述べているほど正確明瞭なものではなかった。なぜなら、これらの書き込みは本来「『資本論』第1巻のための変更一覧表」の準備作業でしかなかったからである。エンゲルスはこのような不十分な指示にしたがって第3版を編集することになったのである。ここに第3版が『資本論』第1巻の本文改訂に関するマルクスの根本思想を十分反映していない理由が存在する。

既述のように、この根本思想が正確かつ明瞭に総括されている「一覧表」

31) 唯一の例外は次の指示である。„p. 711 in der Note Zeile (10 von oben, Text nicht eingerechnet) ist statt *Haferschleim* zu lesen *Haferbrei* (oat-meal porridge)“ (MEGA II/8, S. 16) この「一覧表」の指示に対応する書き込みはマルクスの自用本に存在しない。しかしここで問題になっているのは単純な誤植(誤記)の訂正であって、内容に関わるものではない。[したがって校正段階でエンゲルスが独自に訂正したとみてよいであろう。]

は、「『資本論』第1巻アメリカ版〔——刊行されなかったが——〕のための変更一覧表」の基底稿であった。このアメリカ版が実際に刊行されていた場合には、それはマルクスの目論見を根本的に実現したことになるだろう。このように考えると、われわれはドイツ語第3版をいわば未完の『資本論』第1巻アメリカ版と特徴づけることができよう。

第3版とそれ以後の諸版、1887年の英語版、1890年の英語版、1890年のドイツ語第4版の間には、内容的な差はほとんど存在しない。両版を準備する際、エンゲルスは、「アメリカ版のための変更一覧表」を当時既にゾルゲから入手していたにも拘らず、依然として「一覧表」の指示を〔第3版のときと同様に〕ほとんど考慮しなかった³²⁾。『資本論』第1巻の現行版は第4版に依拠しているのであって、したがってまた、事実上第3版に依拠している。ここに『資本論』第1巻のテキスト・クリティークの最大の問題の一つがある。

既述のように、「一覧表」の約70の指示はドイツ語第2版本文のフランス語版本文への置き換えを命じている。ところがこのうち約45の指示が全く、あるいは部分的にしか第3版で考慮されなかったのである。では、これらの指示を完全に考慮にいったとき、『資本論』第1巻の本文は内容的にどのように改善されるのか。この問題は別稿で解明されるべきである。またエンゲルスはなぜ英語版やドイツ語第4版で徹底的な本文改訂を企てなかった³³⁾の

32) Vgl. Joachim Conrad/Helga Hues/Eike Kopf, Zu Marx' Handexemplar der zweiten Auflage des ersten Bandes des „Kapitals“. In: *BzMEF*, H. 24, 1988.

33) エンゲルスはゾルゲに送られた「一覧表」を重視していない。彼の意見では①「一覧表」はドイツ語版のためのものではなく、基本的にアメリカ版のために執筆されたものなので、そこでの諸指示は必ずしも本質的なものではなく (Vgl. *MEW*, Bd. 36, S. 476), ②エンゲルスが実際に第3版編集に用いた、マルクスの自用本の指摘ないしは指示及びロンゲ夫人あて献呈本の書き込みは、「一覧表」よりも「ずっと後」(*MEW*, Bd. 36, S. 476) になって作成されたものである。だが1877年9月27日付のゾルゲあてのマルクスの手紙では、「一覧表」の改訂指示はテキストを本質的に改訂するものである、と明言されている。確かに〔自用本や献呈本の〕若干の指示、書き込みは「一

か。別稿ではこの理由も厳密に検討したい。

II アイケ・コップフ教授のコメント

1 コメント

親愛なる大村教授。10月17日付のお便りとお論稿「……エンゲルスはマルクスのいかなる指摘ないしは指示にしたがったのか」〔及び雑誌〕『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第11号〔のご送付〕に心から感謝します。

…中略…

さて、上のご論稿に対する私の意見は次の通りです。

ご論稿で先生はMEGA第II部第7巻、第II部第8巻の「序文」、「テキスト史」、「異文一覧」、「特殊指示一覧」（例えば、自用本の欄外書き込みなど）の熱心な利用者であることをはっきりと示されました。このことは大変喜ばしいことであります。私は、ここで先生が明確にされた学問上の入念・周到さに大きな敬意を払うものです。

ここ数年間先生が温められている構想——すなわち1877年にアメリカで計画された『資本論』第1巻刊行のために、ゾルゲに送られたマルクスの指示の一覧表を利用して、このアメリカ版がどのような版となるかを再構成し

覧表」よりも後から記入されたものである。しかしその大半、なかでも、ドイツ語本文がフランス語版に置き換えられるべきである、という「一覧表」のもっとも重要な指示は、「一覧表」を作成する直前にマルクスが記したものである。したがって上記エンゲルスの見解は誤っている。

だが、マルクスの自用本の指摘や指示およびロンゲ夫人あての献呈本の書き込みよりも、「一覧表」の方がはるかにはっきりと定式化されているのは一目瞭然である。こうした事実をエンゲルスも知らなかったとは言えないのではあるまいか？ 私見では、〔手紙などで言及されているのは〕別の原因が第4版の編集でエンゲルスが徹底的な本文改訂を断念することを余儀なくさせたと思われる。

てみるということ (Vgl. *BzMEF*, H. 27, S. 216ff. [前節注 28) での参照論文をさす]) —— は、私見では、(その最初の姿のままでは) 伝承されていない『資本論』第1部の第3次異稿 (Vgl. *BzMEF*, H. 28, S. 169ff.) を再構成するのと同様に、意義深くかつ学問的に理にかなった計画です。

しかしやはりそれを MEGA の一つの巻を使って実現するわけにはいかないでしょう。というのは、MEGA はマルクスやエンゲルスが書いたものを利用者に提供するものであって、彼らが書かなかったものを提供するものではないからです〔下線はコップフ教授。以下同様〕。議論になっている問題については、MEGA は次のあらゆる文書、資料を提供しています。ドイツ語第2版、フランス語版、ドイツ語第2版およびフランス語版のマルクスの自用本、アメリカ版のための変更一覧の諸草案およびゾルゲに送られた完成稿そのもの、さらに英語版やドイツ語第3および第4版、そして—— 数年以内には—— 1872年から1894年の往復書簡が刊行されます。

だから、こうした質的に新たな基盤の上で、学問的な議論をすることができるのであり、ここでまた MEGA の有用性とそれにとって代わるものがないことが示されます。

議論の焦点は MEGA 第II部第7巻や第II部第8巻で印刷された諸文書、すなわちテキストや欄外書き込み、その他のマルクスおよびエンゲルスの覚書ではなく、MEGA 第II部第8巻の「序文」あるいは「テキスト史」〔を執筆した〕編集者解説の諸章句です。ここで考慮して頂きたいのは、こうした解説は、一面では、確かにある一定の時点での研究史の到達点を反映していますが、他面では、それ自体が次の研究へのステップとなることを願ったものだということです。

先生は第II部第8巻編集者の一般的な見地の変更、およびさまざまな時期に文章化されたこの巻の諸部分（「序文」や「テキスト史」）におけるわずかな異同も正確に確認されています。当時、私たちには次のような不利な状況がありました。すなわち、私たちは、この巻に新たに取り入れられるように

なった諸資料についての学問的な議論がまだ完了していないうちに、この巻のさまざまな部分を技術的に仕上げることを余儀なくされたのです。

私たちは 1988 年 10 月、ベルリンで開催された『資本論』会議で、第 II 部第 8 巻の編集者としての私たちの見地を次のように表しました (Vgl. Ebenda, Heft 27, S. 223ff. (前節注 14) で紹介した共筆稿を指す)。私たちの見解によれば、ドイツ語第 3 版は「それが準備されることをマルクスが知っていた第 1 巻の最後の版 (Auflage) ないしは〔新〕版 (Ausgabe) である。……第 3 版ではマルクスが少なくとも、どのみち考えることになったか、あるいは〔実際に〕指示した、テキストの変更が、マルクスの戦友で、マルクスと最も密接に協力していたエンゲルスによって、最も包括的に実現されたのであって、それ故、第 3 版は事実上、いわば、ある程度まで、『資本論』第 1 巻のマルクスの最終決定版と特徴づけられる。MEGA 第 II 部第 8 巻の序文では、われわれは…… —— 1984 年のわれわれの見地を訂正して —— 次の定式化を行った。『したがってドイツ語第 3 版はマルクスの考えにしたがったものである』、と」(ebenda, S. 228)。

先生の見地は次のように要約されます。エンゲルスはドイツ語第 3 版を作成するために、マルクスの『資本論』第 1 巻のための変更一覧表 (MEGA II/8, S. 7-20) を用いなかつたのであって、エンゲルスによる全ての版は『資本論』第 1 巻のテキスト改訂に関するマルクスの基本的な見地を十分踏まえたものではない、と (ご論稿, 2 ページ [本稿 220 ページ])。エンゲルスはこの一覧表を用いなかつた、すなわち、ドイツ語第 3 版を仕上げるまで、彼はマルクスの遺稿を印刷のために徹底して使い尽くすというほど十分使いはしなかつた、—— こうした意味では、先生のお考えは多分正しいでしょう。しかし私たち MEGA 編集者としても、この仮説を確信をもって支持できると考えていたのです。一覧表ではっきりと指示されている諸変更のいくつかがその通りに実現されていない、という事実が、この仮説を明確に代弁しています (ご論稿, 4-8 ページ [本稿 223-227 ページ]) で先生はそうした事

例を完璧に例証されました)。したがってまた、私たちはエンゲルスが一覧表を使ったと主張するのではなく、控え目に、「十中八・九」利用したといたったのです (MEGA II/8, S. 850)。

論拠をもって先生は、アメリカ版をどう見るか、という問題を提起されています。第3版は未完のアメリカ版である(ご論稿, 8ページ[本稿229ページ]), と先生がおっしゃるとき、これは正当な指摘です。しかしこれに同意できるのは一定の範囲内においてです。なぜなら、私たちは、マルクスがもしアメリカ版を仕上げている場合、その最終テキストにどのような修正を加えることになったかを、知らないからです。先生は当然、マルクスおよびエンゲルスのあらゆるテキストを、それがドイツ語で、フランス語で、あるいは英語で書かれたものかどうかには拘らず、日本語に翻訳されているので、先生にとっては、言語表現上の相違はマルクスやエンゲルスにとってほど重大なものではありません。エンゲルスは第1巻の底本は常にドイツ語版であって、フランス語版や英語版ではない、ということを指摘しています。これが先生の仮説に対する反論の一つです。さらに次のことも注意する必要があります。もしエンゲルスが、1886年になって初めて、ゾルゲによって一覧表に関心をもつようにさせられ、一覧表に含まれていた指示は、エンゲルスがマルクスから口頭で受け取っていた範囲内のものであったとした場合、彼はこれらの諸指示を英語版やドイツ語第4版で是非とも全て考慮することになったのでしょうか。この一覧表とは別の周知の仕方を、すなわち、できるだけ後期のマルクス自身に語らせるという方法を、エンゲルスは念頭においていたのです。エンゲルス自身、また次のように述べているのです。1883年(ドイツ語第3版)あるいは1887年(英語版)と比較すると、1877年の諸指示(アメリカ版のための諸一覧表)はずっと古い性格のものである、と。ここに私が述べたことの典拠は先述の〔BzMEF〕第27号〔所収の私の共筆稿〕に含まれています。

また次のことも勘案して頂きたいと存じます。たえず『資本論』の諸版に対

して自ら厳しく振舞ったマルクスが（例えばクニースや、ピールシュトルフや A. ワーグナーに対する 70 年代半ばから 80 年代前半にかけての彼の評注あるいは抜粋を考えて下さい）、エンゲルスに対して、口頭で、ドイツ語第 3 版にどのようなテキストの変更がなされるべきかを指示した際、1877 年に作成された彼の変更の諸指示を全く問題にしなかった、と考えることができるでしょうか。いまドイツ語第 3 版に対するテキスト史を書くとしたら、私は、エンゲルスは十中八・九というのではなく、「ひょっとしたら (möglichlicherweise)」マルクスが 1877 年に作成した一覧表を利用したかも知れない、と定式化するでしょう。

この間英語版を収載する MEGA 第 II 部第 9 巻も刊行されていますので、先生はこの巻の編集者の見解もご存じのことと存じます (S. 15*f. und 711)。

予告されている英語版およびドイツ語第 4 版に関する次のご論稿を大いに期待しています。……

敬具

アイケ・コップフ (自署)

2 意見交換の成果といくつかの問題

以上がアイケ・コップフ教授の私見に対するコメントの全容である。ここから次のことが明らかである。

第一に、彼我の係争点の一つ、エンゲルスは「『資本論』第 1 巻のための変更一覧表」をドイツ語第 3 版の編集で使ったかどうか、については、コップフ教授もまた、かつての立場を事実上放棄して私見に大きく歩み寄ったといえる。

確かに、コメント末尾のコップフ教授の次の言及、すなわち、「いまドイツ語第 3 版に対するテキスト史を書くとしたら、私は、エンゲルスは、十中八・九 (mit grosser Wahrscheinlichkeit) というのではなく、『ひょっとしたら (möglichlicherweise)』マルクスが 1877 年に作成した一覧表を利用したかも知

れない、と定式化するでしょう」、は、教授がまだ両者の関連を完全に否認するには至っていないことを示している。しかし、この関連を「十中八・九」と推定していた段階、すなわち、MEGA 第II部第8巻を編集していた段階でも、「エンゲルスはこの一覧表を用いなかった、すなわち、ドイツ語第3版を仕上げるまで、彼はマルクスの遺稿を印刷のために徹底して使い尽くすというほど十分使いはしなかった」、と教授たちも考え、このことを「私たちはエンゲルスが一覧表を使ったと主張するのではなく、控え目に、『十中八・九』利用した」、としていたというのだから、この新たな定式化は、教授が両者の関連の否定に向かってさらに一步踏み出したことを意味するのは明白であろう。

第二に、しかしこのこと以上に止目すべきは、ドイツ語第3版はいわば「未完のアメリカ版」であるという、I-4で提起した筆者の仮説を、コップフ教授が「正当な指摘」としている点である。もっともこの場合にも教授の同意は無条件ではない。

①この仮説は言語表現上の相違を十分考慮したものではない。エンゲルスは第1巻の底本は常にドイツ語版であって、フランス語版や英語版ではないと考えていた、②ドイツ語第3版(1883年)や英語版(1887年)と比較するとアメリカ版のための「変更一覧表」(1877年)は「ずっと古い性格」のものであって、これに依拠することは「後期のマルクス」を無視することになりはしないか、③マルクスとエンゲルスの信頼関係を考慮すると、死の間際にマルクスは「一覧表」についての指示も与えていたに違いなく、それにエンゲルスはしたがったのではないか。この3点が教授が私見を無条件に肯定できない理由だが、ここには私見に対する誤解も含まれているように思われる。順序は逆になるが、論点③からみよう。

マルクスとエンゲルスが強い信頼関係で結ばれていたことは事実であって、このことを筆者は否定するものではない。しかし両者にそのような信頼関係が存在していたからといって、そのことが直ちに「一覧表」についてマ

ルクスがエンゲルスに遺言していたことを意味するものではない。もしそのような遺言があったとすれば、ドイツ語第 3 版を編集する際エンゲルスがこれについて何かの言及をしているとみる方が自然だが、I-2 に記したように、この間彼が「一覧表」に言及することは一度もないのである。しかしドイツ語第 2 版のマルクスの自用本やフランス語版の書き込みについては、第 3 版はこれに依拠していると明言しているのである。また教授が強調する「口頭の指示」なるものについても、エンゲルスが初めて言及したのは、I-注 14) に記したようにドイツ語第 3 版の序文においてであって、しかも当該箇所では、この指示は主として文体に関わり、ドイツ語版とフランス語版のテキストの入れ換えなど、内容に関するものは上記自用本の書き込みによった、としているのである。こうした事実的な関係について具体的に反証されない限り、筆者はこの批判を受容することはできない。

論点②についていえば次のようになる。「草稿は大体においてマルクスが第 3 版のために自用本に書き留めておいたこととおなじことを含んでいる。他のものはより多くフランス語版からの挿入を指示しているが、それには僕は無条件には拘束されない。何故かという、1) 第 3 版のための仕事の方がずっと後のもので僕にとってより決定的だから……」(MEW, Bd. 36, S. 476)。1886 年 4 月、エンゲルスはゾルゲからアメリカ版のための「一覧表」を受け取ったことに対してこのように述べた。コップフ教授がここで「一覧表」は第 3 版や英語版より「ずっと古い性格」のものであるというとき、念頭においているのはエンゲルスのこの手紙である。手紙でエンゲルスが事実を率直に述べている場合には、筆者は教授の批判を受け入れる。しかし果たしてそのようにいえるのか。I で詳しくみたように、また I-注 33) で重ねて指摘しておいたように、ドイツ語版のテキストをフランス語版に置き換えよという「一覧表」のもっとも重要な諸指示は、ここで言われる「第 3 版のための仕事」すなわち「マルクスが第 3 版のために自用本に書き留めておいたこと」を基礎に作成されたものであって、両者が成立する事実的な関係は、

エンゲルスが述べているのとは正反対なのである。このことを示す「一覧表」と自用本、献呈本の写真を末尾に掲げるが、こうした事実的関係を逐一取り上げて反証されない限り教授のこの論点も説得力を欠いているように思われる。

では①についてはどうか。『資本論』第1巻の底本はドイツ語版であって英語版やフランス語版ではない、というコップフ教授の見解は確かに重要であろう。マルクスの母国語はドイツ語だからである。しかしこの場合、問題を教授のように「言語表限上の相違」という側面に力点をおくのは正しくないように思われる。時間の制約から『資本論』第1巻のドイツ語第2版での改訂は価値論を中心に前半部分に限定され、後半部分、第5篇「絶対的および相対的剰余価値の生産」以後はフランス語版で行われることになり、しかもこれ以後第1巻の大きな改訂は企てられなかった。こうして第1巻に関するマルクスの最新の見解は、第5篇以下についてはフランス語で遺されたのである。ところで「『資本論』第1巻のための変更一覧表」は第5篇以降の全ての篇をフランス語版から翻訳せよとは述べていないのである。部分的に、本質的な改訂を行った箇所についてドイツ語版ではなくフランス語版から翻訳すべきである、としているのである。筆者がフランス語版を、そして「一覧表」を重視するのはこのような経緯からである。ドイツ語第3版を作成する際エンゲルスが利用したマルクスの自用本の書き込みが「一覧表」なしでも十分含意を擱めるものなら、このようなこともそれほど大きな問題にはならない。しかしIでみたように、両者の関係はそうしたものでは決してないのである。

もっともこうしたことをいくら強調しても、それが具体的な内容に踏み込んだものでない限り、教授の同意を得ることは困難であろう。このことは筆者も十分自覚している。第5篇第14章「絶対的および相対的剰余価値」での生産的労働論の改訂と「包摂」規定の削除、それに伴う同章の主題「変更」、第7篇第22章第1節「商品生産の所有法則の資本家的取得法則への転化」に

おける論述の大幅な変更，第 23 章「資本家的蓄積の一般的法則」での集積・集中規定の変更，相対的過剰人口の必然性に関する論証の改善，第 24 章第 7 節「資本家的蓄積の歴史的傾向」の「否定の否定」に関する諸規定の変更，等々。これらはいずれも「書き込み」の不明瞭さが有力な原因となってエンゲルス版では十分考慮されないまま放置されている箇所である。I-4 末尾に記した別稿では，これらの変更点が孕む諸問題を具体的に立ち入って解明することで，先の仮説，すなわち，ドイツ語第 3 版は「未完のアメリカ版」である，を一層説得力のあるものにしたい。

またその際，英語版（1887 年）以後，この時点では既に「一覧表」の浄書稿を入手していたにも拘らず，なぜエンゲルスがそれを徹底して利用しなかったかという問題についても考えたい。

コメントでコップフ教授が参照を要請している英語版を収載した MEGA 第 II 部第 9 巻の編集者「序文」の基調は教授のそれと変わらず，ドイツ語第 3 版を「マルクスの最終決定版」（*MEGA II/9, S. 15**）とさえ規定したりしている——これはコップフ教授ら MEGA 第 II 部第 8 巻の編集者が 1988 年に撤回した見解である。しかし，他方で次のような興味深い事実も伝えている。「いずれにせよエンゲルスは，既に『資本論』の英訳を手中にし印刷の準備を開始したときようやくこの草稿を入手したのであった」（*MEGA II/8, S. 16**），と。I-注 33) で筆者は，英語版でエンゲルスが「一覧表」を十分活用しなかったことを考えるとき，エンゲルスが直接述べている理由とは別の理由にも注目すべきではないかと述べたが，この場合，こうした事実的關係も十分検討に値するであろう。

【付録1】マルクス自用本の書き込みと対応する「『資本論』第1巻のための変更一覧表」(240, 241 ページ)

240 ページは MEGA 第II部第8巻に収録された『資本論』第1巻第2版マルクス自用本 610 ページの書き込みであり (MEGA II/8, S. 551), 241 ページはこれに対応する「変更一覧表」である。これらの書き込み及び「一覧表」の詳細は MEGA 同巻 893-894 ページを参照。

削除や訂正が加えられていることもあって、「一覧表」は判読し易いものでは必ずしもないが、自用本の書き込みと比べた場合には、ページ数や行数の指示、フランス語版対応箇所の指示など、いずれをとっても両者の間には格段の差があるのがわかる。これは次に掲げるロンゲ夫人あて献呈本の書き込みと「一覧表」を対比した場合にもいえることである。

ちなみに、MEGA 同巻には収められていないが、筆者が先年社会史国際研究所 (IISG) で調査したときの記憶では、ゾルゲに送られた「『資本論』第1巻アメリカ版のための変更一覧表」は、この「一覧表」を第三者のために清書したものであっただけに、日本人の筆者にとってもかなり読み易かった記憶がある。いずれにせよ、I-4, 注 33) および II-2 末尾でエンゲルスを批判して述べたように、自用本の書き込みが基礎になって「一覧表」が成立したこと、したがって、書き込みの成立時期の方が「一覧表」よりも早いということは、両者を一見するだけでも明白ではなかったか、と思われる。

【付録2】ロンゲ夫人あてフランス語版『資本論』第1巻献呈本におけるマルクスの書き込みと「一覧表」。(242, 243 ページ)

242 ページの写真は MEGA 第II部第7巻に収録されたロンゲ夫人あてフランス語版『資本論』第1巻献呈本 221 ページのものであり (MEGA II/7, S. 744), 243 ページはこれに対応する「変更一覧表」(MEGA II/8, S. 815) である。これらの書き込みおよび「一覧表」の解説は MEGA 第II部第7巻 758 ページ、及び本稿 233 ページ, 225 ページ及び I-注 21) を参照。

Handwritten notes at the top of the page, including the number 610 and some illegible scribbles.

die, wie Hegel richtig sagt, „im Verzehren des Vorhandenen besteht“ und nunmehr auch im Luxus persönlicher Dienste sich breit macht, war es für die bürgerliche Oekonomie entscheidend wichtig, herauszuheben, dass das Evangelium der neuen Gesellschaft, nämlich Akkumulation von Kapital, die Anlage von Mehrwerth im Ankauf produktiven Arbeiter als *conditio sine qua non* präfigt. Andronetti hatte nun gegen das Vollverwertheln zu polemisieren, welches die kapitalistische Produktion mit der Schatzbildung verwechsetzt²⁹⁾ und daher vielmehr akkumulirter Reichtum *vel* Reichtum, welcher der Zersetzung in seiner vorhandenen Naturform, also dem Verbrauch entzogen oder auch vor der Circulation gerettet werde. Vermeidung des Geldes gegen die Circulation war gerade das Gegenstück seiner Verwerthung als Kapital, und Waarenakkumulation im schatzbildnerischen Sinn reine Narrheit. Akkumulation von Waaren in grossen Massen ist Resultat einer Circulationsunterbrechung oder der Ueberproduktion³⁰⁾. Allerdings läuft in der Vollverwerthung das Bild der im Konsumtionsfonds der Reichen gehaltenen, langsam sich verschleuderten Güter unter. Andronetti die Veranschaulichung, die Platonen, die allen Produktionsweisen angehört und wobei wir einen Augenblick in der Analyse des Circulationsprozesses verweilen werden. So weit also ist die klassische Oekonomie im Recht, wenn sie den Verzicht von Surplusprodukt durch produktive Arbeiter statt durch unproduktive als charakteristisches Moment des Akkumulationsprozesses betont. Aber hier beginnt auch ihr Irrthum. A. Smith hat es nur Mode gemacht, die Akkumulation bloss als Konsumtion des Mehrprodukts durch produktive Arbeiter oder die Kapitalhegung des Mehrwerths als dessen blossen Umsatz in Arbeitskraft darzustellen. Hören wir z. B. Ricardo: „Man muss verstehen, dass alle Produkte eines Landes konsumirt werden; aber es macht

Vertical handwritten notes on the left margin, including symbols like a cross and various scribbles.

²⁹⁾ „No political economist of the present day can by saving *anima mero* bounding; and beyond this contracted and insufficient proceeding, no use of the term in reference to the national wealth can well be imagined, but that which must arise from a different application of what is saved, founded upon a real distinction between the different kinds of labour maintained by it.“ (Marx I. c. p. 83, 80.)

³⁰⁾ „Accumulation of wealth . . . non-exchange . . . overproduction.“ (Th. Corbet I. c. p. 14.)

APR 21 1901

les plus simples et les premiers ~~travaux~~; ils leur donnent aussi à manger cette partie de la racine du papyrus, qu'on peut rôtir au feu, ainsi que les racines et herbes des plantes marécageuses soit crues, soit bouillies ou rôties. L'air est si doux que la plupart des enfants vont sans chaussures et sans vêtements. Aussi un enfant, jusqu'à sa complète croissance, ne coûte pas au gross des parents plus de vingt drachmes. C'est là principalement ce qui explique qu'en Égypte la population soit si nombreuse et que tant de grands ouvrages aient pu être entrepris¹. C'est bien moins cependant à l'étendue de sa population qu'à la faculté d'en employer à des travaux improductifs une partie relativement considérable que l'ancienne Égypte doit ses grandes œuvres d'architecture. De même que le travailleur individuel peut fournir d'autant plus de surtravail que son temps de travail nécessaire est moins considérable, de même moins est nombreuses la partie de la population ouvrière que réclame la production des subsistances nécessaires, plus est grande la partie disponible pour d'autres travaux.

La production capitaliste une fois établie, la grandeur du surtravail variera, toutes autres circonstances restant les mêmes, selon les conditions naturelles du travail et surtout selon la fertilité du sol. Mais il ne s'ensuit pas le moins du monde que le sol le plus fertile soit aussi le plus propre et le plus favorable au développement de la production capitaliste, qui suppose la domination de l'homme sur la nature. Une nature trop prodigue « retient l'homme par la main comme un enfant en lièvre »; elle l'empêche de se développer en ne faisant pas de son développement une nécessité de nature². La patrie du capital ne se trouve pas sous le climat des tropiques, au milieu d'une végétation luxuriante, mais dans la zone tempérée. Ce n'est pas la fertilité absolue du sol, mais plutôt la diversité de ses qualités chimiques, de sa composition géologique, de sa configuration physique, et la variété de ses produits naturels, qui forment la base naturelle de la division sociale du travail et qui excitent l'homme, en raison des conditions multiples au milieu desquelles il se trouve placé, à multiplier ses besoins, ses facultés, ses moyens et modes de travail.

C'est la nécessité de diriger socialement une force

1. Diocl., l. c., l. I, ch. 60.

2. « La première (richesse naturelle), étant de beaucoup la plus libérale et la plus avantageuse, rend la population sans cesse, orgueilleuse et adonné à tous les excès; tandis que la seconde développe et affermit l'activité, la vigilance, les arts, la littérature et la civilisation. » (England's Treasure by Foreign Trade, or the Balance of our Foreign Trade to the Rule of our Treasure. Written by Thomas Mun, of London, Merchant, and now published for the common good by his son John Mun. Lond., 1669, p. 181, 182.) « Je ne conçois pas de plus grand malheur pour un peuple, que d'être jeté sur un morceau de terre où les productions qui concernent la subsistance et la nourriture sont en grande proportion spontanées, et où le climat n'exige ou ne réclame que peu de soins pour le vêtement... Il peut y avoir un extrême dans un sens opposé. Un sol incapable de produire, même s'il est travaillé, est tout aussi mauvais qu'un sol qui produit tout en abondance sans le moindre travail. » (An Inquiry into the present high Price of Provisions. Lond., 1767, p. 10.)

naturelle, de s'en servir, de l'économiser, de se l'approprier en grand par des œuvres d'art, ou un mot de la dompteur, qui joue le rôle décisif dans l'histoire de l'industrie. Telle a été la nécessité de régler et de distribuer le cours des eaux, en Égypte¹, en Lombardie, en Hollande, etc. Ainsi en est-il dans l'Inde, dans la Perse, etc., où l'irrigation au moyen de canaux artificiels fournit au sol non-seulement l'eau qui lui est indispensable, mais encore les engrais minéraux qu'elle détache des montagnes et dépose dans son limon. La canalisation, tel a été le secret de l'épanouissement de l'industrie en Espagne et en Sicile sous la domination arabe².

La faveur des circonstances naturelles fournit, si l'on veut, la possibilité, mais jamais la réalité du surtravail, ni conséquemment du produit net ou de la plus-value. Avec le climat plus ou moins propice, la fertilité de la terre plus ou moins spontanée, etc., le nombre des premiers besoins et les efforts que leur satisfaction impose, seront plus ou moins grands, de sorte que, dans des circonstances d'ailleurs analogues, le temps de travail nécessaire variera d'un pays à l'autre³; mais le surtravail ne peut commencer qu'au point où le travail nécessaire finit. Les influences physiques, qui déterminent la grandeur relative de celui-ci, tracent donc une limite naturelle à celui-là⁴ mesure que l'industrie avance, cette limite naturelle recule. Au milieu de notre société européenne, où le travailleur n'achète la permission de travailler pour sa propre existence que moyennant surtravail, on se figure facilement que c'est une qualité innée du travail humain de fournir un produit net⁵. Mais qu'on prenne par exemple l'a-

1. C'est là nécessité de calculer les périodes des débordements du Nil qui a créé l'astrologie égyptienne et en même temps la domination de la caste sacerdotale à titre de directrice de l'agriculture. « La solstice est le moment de l'année où commence la crue du Nil, et celui que les Égyptiens ont dû observer avec le plus d'attention.... C'était cette année tra- pique qu'il leur importait de marquer pour ce diriger dans leurs opérations agricoles. Ils durent donc chercher dans le ciel un signe apparent de son retour. » (Curtius : *Discours sur les révolutions du globe*, édit. Haefler. Paris, 1863, p. 161.)

2. La distribution des eaux était aux Indes une des bases matérielles du pouvoir central sur les petits organismes de production communale, sans connexion entre eux. Les conquérants mahométans de l'Inde ont mieux compris cela que les Anglais leurs successeurs. Il suffit de rappeler la famine de 1863, qui a coûté la vie à plus d'un million d'indiens dans le district d'Orissa, au Bengale.

3. « Il n'y a pas deux contrées qui fournissent un nombre égal de choses nécessaires à la vie, en égale abondance et avec la même quantité de travail. Les besoins de l'homme augmentent ou diminuent en raison de la sévérité ou de la douceur du climat sous lequel il vit. La proportion des travaux de tout genre auxquels les habitants de divers pays sont forcés de se livrer ne peut donc être la même. Et il n'est guère possible de déterminer le degré de cette différence autrement que par les degrés de température. On peut donc en conclure généralement que la quantité de travail requise pour une population donnée atteint un maximum dans les climats froids et un minimum dans les climats chauds. Dans les premiers en effet l'homme n'a pas seulement besoin de plus de vêtements; mais la terre elle-même a besoin d'y être plus cultivée que dans les derniers. » (An Essay on the Governing Causes of the Natural Rate of Interest. Lond., 1760, p. 60.) L'auteur de cet écrit qui a fait époque est J. Heccey. Mun lui a emprunté sa théorie de l'intérêt.

4. « Tout travail doit laisser un excédant. » Froudhon (en ditrait que cela fait partie des droits et devoirs du citoyen).

Handwritten notes in French:
 L'excédant est la plus-value
 qui est le produit net
 de la plus-value
 qui est le produit net
 de la plus-value

